

心的外傷理論としてのダブル・バインドの再構成： —「自己-確証」と「抽象性」をキーワードとして—

藤本 美貴ⁱ

G. Bateson らによって提唱された「ダブル・バインド理論」は、今日に至るまで、マクロ社会学的分析に役立てられるなど様々な領域から応用可能性が見出されてきた。だが他方で、本理論に託された初発の目的、すなわち「母子関係」を基本モデルとする親密かつ非対称な対人相互行為に着目し、その中で発生しうる一種特異な「心的外傷」の体験過程を理論化するという目的は、積極的には顧みられない傾向にある。本稿ではまず、この重要な目的とその内容が顧みられなくなった主要な要因として、ダブル・バインドを時間的・空間的に“ぶつ切り”にして捉えるという限局的・量的理解の趨勢があったことを指摘する。こうした理解が、本理論によって真に明らかにされようとした心的外傷体験の全容を見誤るものであったと考えられる。次いで筆者は、その全容を解明すべく、これまで注目されることのなかった「自己-確証」と「抽象性」という2つの相互に関連するキーワードに着目し、この2つに集約される理論的独創性とはいかなるものであったかを明らかにする。端的に言うとそのそれは、子どもが母親との特異な相互行為状況を起点に処罰的観念を能動的に感受し、さらにそれを自らの信念として習慣化していくといった、一連の時間的・空間的な継続性という観点からダブル・バインドという事態を把握することである。

キーワード：ダブル・バインド、母子関係、心的外傷、自己-確証、抽象性

はじめに

「ダブル・バインド理論 (Double Bind Theory)」は、20世紀を代表する思想家、G. Bateson ら (Bateson et al. [1956] 1972 以下 “TTS” と略記) によって生み出され、その後、様々な領域から言及されてきた。それは、「社会」の近代化に伴う不可避の悪循環構造を分析するマクロ社会学的観点をはじめ、教育や医療、政治といった個々の場面における制度上ないし理念上の矛盾、およびそれに直面した個人が抱く内的葛藤とその解消の方途を分析するミクロな観

点に至るまで、多岐に及んでいる¹⁾。他方、こうした幅広い応用可能性が——過剰な単純化も所々でなされつつも——活発に見出されるのに対して、本理論に託された初発の目的に関しては、今日、その内容が積極的には顧みられない傾向にある。

本理論に託された初発の目的とは、ある特異な対人関係の様式を克明に記述することであった。Bateson らはまず、親密で閉鎖的かつ非対称な²⁾ 相互行為の場として機能しうる一種の「母子関係」に着目する。その上で、「愛情」と「敵意」という2種類の情動メッセージが相矛盾する形で発せられるという、子どもにとって極めて困難な事態を描き出す。彼らはこの描写をもとに、子どもに深刻な精神疾患をも引き起こしかねない一連の「心的外傷 (psychic

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

trauma)」の体験過程を理論化すべく、実際の家族関係への参与観察に加え、既存の哲学的・論理学的命題も参照しつつ、「ダブル・バインド」という用語を理論概念として彫琢するに至ったのである。

何故この重要な目的が今や積極的に顧みられなくなったのか。以下ではまず、その主な要因について探りたい。

I 本質的要因をめぐって

1. 経験科学の立場から見た「実証性」

筆者が本質的な要因と考えるのは次の点である。それは、本理論を経験科学の一領域たる心的外傷理論として見た際、あまりにもその「実証性」を示す根拠が欠如しているのではないか、という問題である。

原著者の1人であるJ. Haley (1976: 67-8) 自身の言明が、その問題の核心を概ね反映したものである。彼は後年、本理論を提唱するに至った経緯を振り返り、経験科学としての実証性を十全に担保するような「自然史的データ (natural-history data)」および個々の具体的な観察事例、すなわち、何らかの客観的な「立証根拠 (verification)」と呼ぶべき類のものが実は自分たちの手元にないまま、研究が進められたと述べている。つまり、客観的に見て「これがダブル・バインドと呼ぶべき〈状態〉である」と明確に判断できるに足るような具体的な「外傷的〈局面〉」なるものが、実際の家族関係の観察を通じて厳密に発見されたわけでは必ずしもなかった、というのである。

本理論を世に知らしめた“TTS”論文のタイトルにもあるように、本理論はもともと「統合失調症の病因研究」という主題を掲げていた³⁾。そうした、現在でも精神医学内部で枢要な位置を占め、具体的かつ精密な解明が急がれる主題を掲げていたことに鑑みても、Haleyの言明によって本理論が、経験科学の観点からすると実に致命的とも言うべき「無根拠さ」を持つものとして受け止められたことは想像

するに難くない。J. Cullin (2006: 135-6) が述べるように、一部の科学者や思想家の間で、本理論を「非科学的なナンセンス (non-scientific nonsense)」あるいはより痛烈に「非科学的な駄作 (non-scientific rubbish)」として一蹴する風潮があったり、原著者を代表するBateson (1966) 自身が後年、自嘲的なニュアンスも込めて「あてにならない理論 (slippery theory)」と呼んだのも、この点で無理はなかったように思われる。

さらに言うと、G. Abeles (1976) やC. E. Sluzki & D. C. Ransom (1976b) が述べるように、“TTS”論文発表後の一定期間、本理論が主張する外傷的な破壊力の一端を実際に検証すべく、様々に創意工夫がされた心理実験や参与観察の開発が後を絶たなかったのは、上記のような批判的風潮に対応するための一過性の反動であったのではないかと考えられる。一例としては、実験者が複数の統合失調症患者を選び出し、彼らに対してごく単純なゲームを課す中で「報酬」と「罰則」からなる葛藤の〈局面〉を意図的に作成および付与し、それがかつての外傷の追体験となって心理的に影響しうるかどうかを調べた模擬実験などがある⁴⁾。

2. 限局的、量的把握からの脱却

だが筆者は、上記のような模擬実験の結果がいかなるものであれ、本理論の科学的実証性をこれ以上の事後検証の積み重ねによって無闇に押し量らんとする傾向こそ、甚だナンセンスなものではなかったかと考えざるを得ない。我々はここで、上記のような事後検証の類が濫立する状況の前に、Bateson自身が次のような注意を促していた点にこそ立ち返るべきである。そもそも本理論を構想する段階から彼には、「ダブル・バインドを、あたかも1つ、2つと〔量的に〕加算可能であるかのような (as though a double bind were a something and as though such somethings could be counted)」(Bateson [1969] 1972: 272 以下、下線および〔〕内は引用者による) 時間的・空間的に“ぶつ切り”にされた限定的〈局

面〉なるものとして捉えようという意図は一切なかったのである。

この主張には、次のような二段階の批判的論点が含まれる。第一に、模擬実験の例のように「実験者」特有の超越的かつ恣意的な立場から一定の外傷的な〈局面〉の現出／解除を容易に「操作」することが可能であるかのような、そしてその操作によって「試行回数」などといった単純な量的変数へとその外傷的な〈局面〉を置き換えることが容易であるかのような種々の実験心理学的な調査とは、根本的に一線を画す理論の構築が目指されていたことが示唆されている。第二は、仮にそうした「(模擬) 実験」という文脈から離れ、現実の母子関係を継続的に観察するという機会を得たとしても、その中から外傷的であると思しき〈局面〉を限定的に抽出し、その量的な多少によって外傷性の深刻さを判定するといった立場を決して称揚するものではない、という主張である。こうした、現実の相互行為を「限局的」かつ「量的」に捉えることで本理論の経験科学的な実証性を担保しようという試みは、本理論をめぐるBatesonらの真意をそもそも汲み取ったものではないのである。

今日に至るまでこうした限局的な理解の趨勢に蝕まれ、結果として「実証性なき空論」といった烙印まで付されてしまったことについては、Bateson自身、「TTS」論文の発表段階で「〔抽象概念の〕物象化という問題⁵⁾」を明確に吟味していなかった (not yet articulately examined the reification problem) (Bateson [1969] 1972: 272) ことが最大の要因であったと反省している。だが彼は、その反省を踏まえつつ、本理論が「それ自体高度に抽象的なものであり、それに伴い自己－確証的となる傾向を持ちうる理論である (the theory itself is highly abstract and, to this extent, is itself likely to be self-validating)」(Bateson 1966: 417) ということを強く主張し、その主張を根拠とした上で、「経験的事実を用いての … [中略] … [追体験的な] 検証は、甚だ困難なのである (excessively difficult to test …

[中略] … against empirical fact)」(Bateson 1966: 417) という見解を、「TTS」論文を経て以降、繰り返し述べているのである⁶⁾。

上記引用文にある「自己－確証 (self-validating)」と (高度な)「抽象性 (abstractness)」こそ、彼らの真意を的確に表すキータームであったに違いないと筆者は考える。次章ではまず、これまで注目されることのなかった2つのキータームの中身を説明するための準備作業として、Batesonらが描いた母子の相互行為場面について詳細に分析する。

II 母子相互行為場面の分析

「ダブル・バインド」という用語を目にしたとき、一般的には、Batesonらが描写した以下のような母子の相互行為場面が真っ先に想定されるだろう。

まず、「子どもが母親を愛情深き存在として〔感じ取り〕応答しようとする、母親は不安を感じ、子どもを遠ざけようとする (mother becomes anxious and withdraws if the child responds to her as a loving mother)、すなわち、子どもの存在が母親にとってまさしく特別の意味を持ち、子どもとの親密な関係に引き入れられそうになると、母親の中に不安と敵意が呼び起される (arouses her anxiety and hostility when she is in danger of intimate contact with the child)」(TTS 212) という場面が導き出される。と同時に、「母親は子どもに対して不安や敵意を持っていることを受け入れることができない (A mother to whom feelings of anxiety and hostility toward the child are not acceptable)」(TTS 212) ため、「そうした感情 [= 不安や敵意] を否定する方法として、子どもを愛していることを強調し、子どもに対して、愛情に満ちた母親として応答しようとする (and whose way of denying them is to express overt loving behavior to persuade the child to respond to her as loving mother)。ところが、子どもがそうした応答をしない場合、母親は〔再び〕彼を遠ざけようとしてしま

う (and to withdraw from him if he does not)」(TTS 212)。ここで重要なのは、「母親の愛情に満ちた振る舞いが、敵意の振る舞いに対する(補償という狙いをこめた)コメントになっているという点である(her loving behavior is then a comment on (since it is compensatory for) her hostile behavior)。つまり愛情のメッセージは敵意のそれとは異なった等級にある (and consequently it is of a different order of message than the hostile behavior)」(TTS 213)にもかかわらず、前者が後者のメッセージの存在それ自体を否定する役割を果たすのである。なおこの場面においては、「母子関係の中に介入することで、葛藤に直面した子どもを救護するような存在、たとえば説得力と洞察力を持った父親など(anyone in the family, such as a strong and insightful father, who can intervene in the relationship between the mother and child and support the child in the face of the contradictions involved)」(TTS 212-3)という第三者の存在は、不在である。

本稿の冒頭でも述べたように、「愛情」と「敵意⁷⁾」という2つの相反する情動メッセージの同時発生が基軸であることを改めて確認できる。この有名な相互行為場面のみが限局的に切り取られ、量的に扱われてきたということが誤解の全てであると筆者は考えている。だがこの問題をめぐる議論は一旦措いて、本章ではこの相互行為場面の本質について、「知」「関係」「処罰」という諸論点から分析を試みる。

1. 等級の相違と「知」の習得過程

第一に注目すべきは、2つの情動が「等級(order)」を異にした上で発せられるという点である。この等級の相違とは、双方の情動が「メッセージ」という形で発せられる際の「形態=手段上の相違」を意味するが、Batesonらはそれを「言語/非言語」、厳密には「言語化の可能/不可能性」という二項対比を用いて説明しようとする。敵意は、「態度、しぐさ、口調、有意な身振り、あるいは言語コ

メントに隠された含意(Posture, gesture, tone of voice, meaningful action, and the implications concealed in verbal comment)」(TTS 207)などの「非言語的手段(nonverbal means)」(TTS 207)を通じて発せられ、それと同時に、その敵意の発現を真っ向から否定するための説得の要素として、「言語化」の作業が容易であるような愛情に満ちた振る舞いがとられる。つまり、言語による「メッセージ」とその背後に潜在する非言語的手段による「メタ・メッセージ」との間の根本的な矛盾が見出される。ここで重要なのは、Batesonらはこの「言語/非言語」という二項対比を、個人の精神構造を説明する際の「意識/無意識」という二元論の既存の使用法とそのまま重ね合わせることを、言い換えれば「言語」を「意識」と、「非言語」を「無意識」と同義で論じることには極めて慎重であった、という点である。この点はほとんど指摘されることがないが、その背景には、S. Freud由来の伝統的な精神分析学の概念および認識に対する、Batesonらの重要な批判的なまなざしが確認できる。

Batesonが後年指摘するように、Freudに代表される古典的な心的階層論は、「意識」を理性的な「知(knowledge)」が集約する表層領域と捉え、他方「無意識」を、本来意識的であり得たにもかかわらず、「抑圧」や「否認」などの防衛機制によって押し込められることとなった「恐ろしく、苦痛に満ちた記憶(fearful and painful memories)」(Bateson 1972: 135)がはびこる、非理性的かつ閉鎖的な深層領域と捉えるものであった。Freudの関心は、こうした階層図式を前提とし、後者の領域の解明へと集中していった⁸⁾。

他方Batesonは、「意識/無意識」という二元論を使用することと、そこに一定の階層関係を想定することには必ずしも反対してはいないものの、上記のような「意識=理性的」「無意識=非理性的かつ閉鎖的」という発想から根本的に脱却し、新たな認識によってその中身を捉え直す必要があると主張する。そのために彼はまず、「知の習得」という事態を捉

え直すことから始める。彼は作家の S. Butler に倣い、それを「行動、知覚、ないし思考の『習慣化』（“habit” — whether of action, perception, or thought）」（Bateson 1972: 134-5）と捉えることによって、表層領域としての意識下においてのみ営まれるものではなく、むしろ「より無意識的かつ太古的水準へと知が沈降してゆく（a sinking of knowledge down to less conscious and more archaic levels）」（Bateson 1972: 141）必然的かつ漸進的な過程と見立てる。「知」およびその習得が理性的性格を持つものであることを前提とするならば、この発想の転回によって無意識を、意識化の作業が常々迫られるべき野蛮で非理性的な領域であるといった従来の認識から救い出すことが可能となるのである。

2. 「関係」の性質を規定する無意識的＝非言語的水準

「継続的に稼働し、必要不可欠で全包括的な主要過程（primary process, as continually active, necessary, and all-embracing）」（Bateson 1972: 136）として、いわば肯定的に捉え直される無意識はまた、外界との接触が一切遮断された閉鎖的な領域という認識からも脱却を果たされることとなる。それは、本理論が提唱されるきっかけともなった Bateson による一連のコミュニケーション分析に端的に示される（Bateson [1955] 1972; 1956）。彼は、対話的コミュニケーションの場面ならびにその中で発せられる任意のメッセージを想定し、そこにはその字義通りの意味を相手に伝えるといった「指示的水準（denotative level）」（Bateson [1955] 1972: 178）のみならず、さらに抽象の段階を上げ、相手との「関係」それ自体の性質を規定し伝達するという「メタ・コミュニケーション的水準」も例外なく含まれることを発見する⁹⁾。これら二つの水準の内容が矛盾する事態こそ本理論の問題とするところなのだが、さしあたりここでは、前者の内容が意識的＝言語的水準に、後者が無意識的＝非言語的水準に基本的に属するものであることを確認しておこう。ここから

Bateson にとって無意識は本質的に、現前する他者ないし外界志向的な性格を持ちうる、開放的な領域として捉え直される。言い換えると無意識は、対人相互行為場面において、他者に向けて「関係」の性質を継続して伝えるべく開放的な領域となることが必要不可欠なのである。

それ故、先の母子相互行為場面に戻ると、当の母親が抱く敵意ないし彼女の存在論的本質を、「非理性的」とか「病的」などといった烙印と共に孤立させ、その要因を個別内的観点から探究するといった閉鎖的思考は、Bateson らの関心からは端的に排斥されるのである¹⁰⁾。彼らはこうした Freud 由来の発想を回避すべく、「言語／非言語」ないしそれと交換可能な「意図／非意図」という二項対比の使用を前面に押し出すことで、ダブル・バインドと称すべき相互行為の記述を試みたわけである。

認知心理学にも通ずる発想をいち早く示した彼らのこうした観点は、子どもの側における一種の「能動的な契機」について問うことへとつながる。それは、目の前の相互行為状況が持つ意味を自ら解釈しようと試みる契機であり、岡野憲一郎（2007: 41）の表現を用いて言い換えれば、母親との相互行為場面を「関係性のストレス」として体験するにあたっての、子どもの側における「感受性の発動」という契機について問うことである。やや先走っていうと、この能動的な契機こそが、「自己－確証」を解明する際の起点となる。

3. 「処罰」

だがその前に、もう一点注目すべき論点がある。それは「処罰（punishment）」である。

Bateson らは、母親から発せられる敵意について、それを一種の「処罰」の表現であると述べた上で、「愛情の撤退、憎しみや怒りの表明、あるいは最も悲惨な場合は、極端な無力感の表明に由来する一種の〔わが子を〕見捨てようとする行為（the withdrawal of love or the expression of hate or anger — or most devastating — the kind of abandonment

that results from the parent's expression of extreme helplessness)」(TTS 206-7) を、その具体的な項目として挙げている。「処罰」という強烈なニュアンスを持った表現を前にすると、何らかの身体的罰を伴うそのように、「処罰を与える側／与えられる側」といった明確な対比の設定を促すような場面が、真っ先に思い浮かべられるかもしれない。その場合、「今なされている出来事は処罰行為である」といった意味の共有が、当の処罰行為が発せられると同時に、双方によって即座になされる。言い換えると、今現在なされている行為とその行為に込められた意味とが矛盾していないため、双方においてその行為の意味が難なく共有されるような処罰の形式である。その上で、処罰を与える側は自身を「処罰者」として、処罰を与えられる側は自身を「被処罰者」として、双方ともに疑うことなく自己規定することが可能であるような事態が、念頭に置かれるものと筆者は考える。

ところが本理論が示そうとする「処罰」は、こうした事態とは異質のものである。そもそも、行為に込められた意味の共有自体が実現されないという事実こそが、問題の根本なのである。母親の敵意は、非言語的な振る舞いを通じて発せられるものであった。その際、この振る舞いの意味が、振る舞いになされると共に十全に他者に伝えられる事態というのは、Bateson らの二項対比に即して言うなら、「これは敵意なのだ」とか「お前のことが嫌いなのだ」といった何らかの言語的手段に変換され伝達される状態を指すものと考えられる。しかしながらそのような可能性は実現されない。なぜなら母親には、自らを「処罰者」として自己規定するに足る、「処罰(敵意)」に対する明確で意識的な気付き(認知)を持つ機会が、原理的に失われているからである。そして、あろうことか言語的水準において発せられるのは、愛情深い振る舞いという全く正反対のものなのである。

本理論における「処罰」とは、こうした母親の非言語的振る舞いをめぐる混乱を前にして、子どもの

側において密にかつ内的に想起されざるを得ない一種の漠然とした「観念」ないし「表象」としての処罰とでも言うべきものである。厳密に言い換えるとそれは、母親の非言語的振る舞いに直面した際、敢えて言語化をすれば「これは私に向けられた敵意であり、処罰行為ではないのか」といった疑念的な様相を帯びる形で、事態の意味を自ら積極的に解釈せざるを得ないような内的状況である。子どもにとっては、苦痛や違和感の源泉である母親の非言語的振る舞いに対して、その意味を解明することが急がれるが、その意味が明確な形で説明されることはなく、むしろ正反対の意味を持つ言語的振る舞いになされることもあり、自ら能動的に感受しえた処罰という「観念」には必然的に疑念がつきまとう。明確な「処罰を与える側／与えられる側」という対比の設定が許される処罰の形態とは全く異質の、母子二者間における独特な非対称性がここにある。それは、自らの振る舞いが「処罰」という意味合いを持つものであるとは一切気づくことのない母親と、そこから「処罰」という観念を感受せずにはいられない子どもとが織り成す、厳然たる非対称性ないし意味の共有不可能性であり、子どもの側にはさらにこの非対称性を乗り越えることが困難であるという意味での「無力感」を伴う恐れすらあると考えられる。

Ⅲ 「自己－確証」

ここで先の母子相互行為場面を振り返ると、子どもにとって上記のような能動的な感受を迫られる機会は、連続的なものとならざるを得ないことが理解できる。なぜなら、「感受性の発動」という形での子どもからの「応答(response)」を経た後には、再度、母親の側から子どもを「遠ざけようとする(withdraw)」という敵意が込められた非言語的振る舞いが続くからである。筆者はこの「連続的な感受性の発動」という事態こそが、本稿におけるキータムの1つである「自己－確証(self-validating)」を解明する際の起点であると考えている。

1. 「自己-確証」の本質 —— 予期による習慣化の命題の強化

既に筆者は、Bateson が無意識的水準へと沈降してゆく「知」の習得過程を、「行動、知覚、ないし思考の『習慣化』」という認知心理学的発想において捉えていたと述べた。前章ではこの議論を、母親の非言語的振る舞いに引き付けて話題にしたが、この「習慣化」の過程は子どもの内的状況にもある程度適用可能なものと考えてしかるべきである。すなわち、Bateson が用いる「知覚 (perception)」を筆者が本稿で主に使用する「感受 (性)」という概念と同義に考えるならば、連続的な感受性の発動は、さらに次の段階に位置する「感受性の発動という行為自体の習慣化」に向けた必然的な足掛かりとなるからである。加えて Bateson らが、「我々の仮説は、ある単一の外傷経験を記述するものではなく、ダブル・バインド構造が習慣的な予期となりうるような連続的経験を記述するものである (Our hypothesis does not invoke a single traumatic experience, but such repeated experience that the double bind structure comes to be an habitual expectation)」（TTS 206）と明確に述べているように、習慣化の過程は「予期 (expectation)」という働きと不可分の関係を持つものと捉えられている。すなわち、習慣化が予期を呼び起こすと同時に、—— 「予期」という表現から既にニュアンスとして感じられるように—— その予期が習慣化の命題である「観念としての処罰の感受」が妥当なものであるかを逐一「強化」する役割を果たす、という循環的関係を取り結んでいるのである。

まさしくこの「予期による習慣化の命題の強化」こそが、Bateson が「自己-確証」というキーワードによって示そうとした事態であると筆者は考える。なお彼は、この緻密な分析に至るまでの思考の萌芽を“TTS”論文以前の著書の中で既に見出していた。彼は、いかなる「処罰からの回避」という選択も不可能であるような世界に身を投げ出された人物は、一定程度の連続的な処罰経験を経た後に、「処罰か

らの回避に対する無力さ」を自らの「信念 (belief)」として形成していくとともに、その信念に依拠するような命題として世界を予期する段階へ移行するという (Bateson & J. Ruesch 1951: 216-7)。その人物は、「世界の性質に関する彼の前提が真のものであると証明されるような方法で、世界の中で行為する (act in the world in such a way that this premise about the nature of the world is demonstrated to be true)」(Bateson & Ruesch 1951: 217) のであり、この「自己-確証」の働きを通じて、外的世界に対する自らの「信念」—— 「命題」「前提」という語と同義に捉えて差し支えなからう—— の「妥当性¹¹⁾」はますます強化されるのである。筆者はここで、M. E. P. Seligman (1975) による「学習性無力感 (Learned Helplessness)」という概念との接点を感じてやまないが、さしあたりダブル・バインドというある種特異な処罰の形態が問題となる文脈に戻ると、子どもは「観念としての処罰の感受」という自ら掲げることとなった信念を習慣化させるべく、その信念に妥当するような外的世界を予期する、言い換えれば、そうした外的世界を自ら選択ないし招聘することによってその確証を得ようとするという、一種の逆説的な「無力さの能動的な選択的証明」を企図することになると考えられる¹²⁾。

2. 「自己-確証」過程の帰結？

従来の研究は概ねここで留まるのであるが、本稿ではさらに一步分析を深めたい。「観念としての処罰の感受」という能動的契機を問題とする本理論においては、前に述べたような「処罰を与える側/与えられる側」の対比を容易に促すような処罰の形態と比較すると、自己-確証の過程はさらに複雑な様相を呈したものとなるのではないかと考えられる。この問題は、次のようなさらなる問いを媒介しつつ明らかにすべきである —— すなわち、そもそも本理論が問題とする自己-確証の過程は、果たして一定の内的な「帰結」へと行き着くものなのだろうか。より厳密に言う、「観念としての処罰の感受」と

いう命題は、習慣化の無意識的水準における帰結たる「知」の体系として、当人の確固たる人格形成の域にまで最終的に到達しきるといえるのだろうか。

筆者の回答は否定的である。というのは、本理論が問題とする自己-確証の過程は、「知の習得」という帰結へと至るのを防ぐような逆方向のベクトルを、常に内包せざるを得ない逆説的な構造となっているからである。ここで鍵となる要素こそ「愛情」である。「観念としての処罰」は、母親の非言語的振る舞いのみを根拠としたわけではなく、実は言語的水準における愛情深い振る舞いと「差異」を根拠に感受されたものである。つまり、「処罰の感受」という命題の妥当性を常に揺るがすような「愛情」という要素が、あろうことかその自己-確証を促すための根本条件にもなっているという逆説的な仕組みなのである。自らに対して「処罰を受けるに値すべき悪い人間である」といった確固たる人格を規定することが一つの帰結——知の習得——だと考えるならば、そしてそれによって、当人がこの人格規定に向けた自己-確証の過程に伴う苦痛から——甚だ病理的な形とはいえ——一定程度「解放」されるものと考えれば、ダブル・バインドにおいては、「愛情」という根本条件が今度は阻害要因として作用することで、一向に「悪い人間」という人格規定へと到達しきれないまま自己-確証の過程を反復し続けるという、独特の苦痛に満ちた内的状況が見出されるのである。この筆者の分析を、Batesonの記述に依拠しつつ述べると以下のようなになる。すなわち、「こうした抽象的前提 [= 処罰の感受という命題の妥当性] が [愛情という要素によって] 暴力的ないし継続的に妨げられる時に、統合失調症や他の関連する症候が現れる傾向にあるということが、ダブル・バインド理論のテーゼなのである (It is the thesis of double bind theory that schizophrenic or related symptoms tend to appear when these abstract premises are violently or continually disturbed)」(Bateson 1966: 417)。

IV 「抽象性」

「自己-確証」およびそれに関連する複雑な内容を解明した上で、次に筆者は、上記引用の中でBatesonが「抽象的前提」と述べている部分に着目したい。「処罰の感受」という命題を「抽象的」と形容するBatesonらの狙いとは一体何か。「抽象(性)」という表現は、そもそも何を意味するのか。

この問題に対する解答は、これまでの一連の議論を踏まえた上で比較的容易に導かれる。結論から言うと、Batesonらの述べる「抽象性」とは、III章冒頭に記した我々にも馴染み深い母子の相互行為場面のみを集約し切れない、それを越えた長期に及ぶ時間的・空間的な「継続性 (sequence)」という観点からダブル・バインドという事態を把握することである、と断言できよう。前章で繰り返し「自己-確証の“過程”」と筆者が述べてきたように、子どもに課せられた自己-確証という現象は、かの相互行為場面が何らかの形で収束に向かった後でもなお継続されうる、一向に何らかの帰結へと辿り着くことの原理的に不可能であるような「過程」として捉えられる。それは、ある時間的・空間的に限定された複数の〈局面〉を捉えるという水準とは異質の、さらに底流にある通時的 (diachronie) な継続性とも言い換えられる。

こうした観点は、これまで話題にしてきた「関係」という概念自体にも既に内包されている。母親の非言語的な敵意は、繰り返し述べたように子どもとの「関係」の性質を規定し伝達するものだからこそ、子どもにとってそれはその場限りでの一過性の効力を持つものではなく、継続的に常に潜在する外傷的要素として観念付けられるのである。もし仮に一過性のものとして受け止められるのであれば、そもそもそれが外傷的な意味を持つことはない。端的に言うと、ダブル・バインドにおいては「関係」こそが、子どもにとって外傷そのものになってしまうのである。

かの相互行為場面のみで収束しない、それを経た後でもなお継続されうる体験を視野に入れるという観点は、次のような論点にも反映されている。Bateson らによると、この継続的な自己-確証という体験においては、かの相互行為場面を構成していた諸要素、すなわち、母親の言語水準における愛情的振る舞い、非言語的水準における敵意的振る舞い、そして本稿では深く追究できなかったが父親等の第三者の不在といった「構成諸要素が完全に一式揃うことは、もはや必要ではなくなる (the complete set of ingredients is no longer necessary)」(TTS 207)。子どもの自己-確証の過程に“先立って”上記の構成諸要素が完全に揃う必要性は、もはやないのである。「ダブル・バインドというシーケンスのいずれかが任意の一部 (Almost any part of a double bind sequence)」(TTS 207) が付与されるかあるいは招聘されるだけで、かつて構成諸要素が全て揃っていた、かの相互行為場面の中で不意に味わってしまった苦痛を、魔術的に再体験するには十分なのである。

V 結語と今後の課題

畢竟、Bateson らが見据えるダブル・バインド状況とは、「共時的な諸要素と通時的なそれとが編成されたもの (made up of synchronic and diachronic elements)」(Sluzki & Ransom 1976a: 48) であったと整理できる。ここで I 章での Haley の言明を再び考慮すると、Bateson らが実際の家族関係を観察する中で直面しそこから経験的に引き取ることが可能だったのは、後者、すなわち自己-確証に向けた子どもの魔術的努力とその絶望的とも言うべき時間的・空間的な継続性であったのである。とすれば、前者、すなわち上にも記した構成諸要素が一式揃ったかつての相互行為場面は、あくまでその自己-確証の過程から演繹的に遡及された、一種の推論的な描写であったと考えられる¹³⁾。Bateson ら自身が、後年、本理論が主として演繹的に導かれた推論の産

物である旨を断片的に示唆していたことから (Bateson et al. 1962: 154-5; Bateson 1976: xii)、そのように判断するのが妥当である。

この演繹的な遡及を、経験科学の範疇を超えた、行き過ぎた思考実験の産物であるとして断罪することはいとも容易い。さらにそれは、次に挙げるような本理論に対する別の観点からの批判とも共鳴する恐れがある。すなわち、かの相互行為場面が発現するものと仮定したとして、その際の子どもの年齢や発達段階、精神的自立・自律の成熟度合、あるいは家族外との接点の獲得状況——社会的な関係資本に頼ることの可能性——など、一外傷理論として本理論を成立せしめるために必要な細部に至るまでの条件設定にまで踏み込むべきではなかったか、という批判である¹⁴⁾。こうした条件設定をめぐる脇の甘さは確かに否めず、思考実験という印象をさらに強くするものであったろうことも想像するに容易い。しかしながら筆者の目的は、こうした批判的論点をつぶさに精査することにあるのでは決してない。筆者が問題視したいのは、演繹的な遡及による描写という点にまで考えが及ぶことすらなく、自己-確証という経験が持つ苦痛とその終わりなき抽象性というモメントを一切排斥し、単にかの初発の相互行為場面だけに視野を限定してきた、今日までの趨勢である。II 章で述べたように、こうした趨勢こそが、本理論によって明るみに出される心的外傷の体験過程を無理やり時間的・空間的に“ぶつ切り”にし、量的に加算可能なものとして把握するという歪曲的理解を生んでしまったのである。

ではこうした歪曲的理解の危険性は、果たして本理論のみに固有の問題なのだろうか。筆者はむしろ、これまで素朴に使用してきた「心的外傷」という総体的な概念を把握する際の、認識上の重要問題と根本的に通底しているのではないかと考えている。精神医学の領域を中心に、現在に至るまで「外傷」という概念は認識上の論争を常に巻き起こしてきた。次なる筆者の課題は、そうした論争の問題に対して、本稿の内容がいかなる認識的意義をもたらすもので

あるかを明らかにすることである。この点については、早急に別稿にて取り組む予定である。

注

- 1) 前者を代表する先行研究として長谷正人 (1991) が挙げられる。後者については、国内に目を向けると、医療分野での応用が特に目立つ (渡辺和子ほか 1991; 藤田博康 2002; 蓮尾英明ほか 2008など)。
- 2) ここで「非対称」と述べたのは、単に「養育する者/される者」といった二項関係や年齢上の上下関係などに留まらない、一種の暴力性を兼ね備えた権力関係を孕みうるものであることを意味したいがためである。「母子関係」と聞くとやや牧歌的なイメージが先行しやすいかもしれないが、本理論は、その中に“暗に”組み込まれる権力関係を早くから暴き出したという点で、画期的な研究というべきである。
- 3) この点もまた、本理論の初発の目的が顧みられなくなった要因の一つであったと筆者は考える。近年、複数の遺伝的要因に基づく生理学的・形態学的分析が精度を高めたことに圧され (功刀浩 2010など)、本理論を筆頭とする、家族内での相互行為の特異性を主たる統合失調症の病因とみる立場はもはや主流ではなくなった。このいわゆる「家族病因仮説」の全般的な衰退が、同時に、心的外傷の体験過程を理論化するという本理論の主目的を矮小化する間接的要因となったと考えられるのである。
- 4) 本論に挙げたものを含む、1960~70年代にかけて実施された実験・観察の一覧およびその詳細については、Sluzki & Ransom (1976b: 152-7) を参照せよ。
- 5) ここで述べられる「物象化」とは、K. Marx によって展開された商品や資本の物神崇拜という議論と直接関連する話ではない。Bateson が「物象化」という表現によって対峙しようとしているのは、有機体同士の相互関係や個々の有機体内における心的な葛藤体験に関して、「エネルギー」や「衝撃」などという平板化された「疑似物理学概念」に基づいて分析しようと試みる、ニュートン・パラダイム以来の伝統的自然科学モデルが支配する状況であった。Bateson 曰く、その状況は西欧社会が近代化し始める19世紀後半に至るまで絶大な影響力を保ってきたというが (Bateson [1971] 1972: xxviii)、筆者の目からすると、その影響力は今日においてもなおすこぶる根強い。とりわけ影響が色濃いのが、奇しくも同じ19世紀後半に幕を開けた心的外傷研究、ならびにその黎明期を支えた Freud を創始者とする精神分析学であったと考えられる。この点については、筆者の次なる課題である心的外傷概念それ自体に対する認識的意義の解明につながる。
- 6) 他には Bateson (1970) などでも同様の主張がなされている。
- 7) 一般的に「敵意」と言うと、外界からの強力かつ不当な攻撃や圧力に対して個人が突発的に感じる、あからさまで反抗的な特徴を持った一過性の情動と捉えられやすいだろう。だがここで扱われる「敵意」は、本文にもあるように、「不安 (anxiety)」や「恐怖」から来る「逃避 (withdraws)」といった情動と連動するものとされている。つまり、何らかの明確な外的要因によって反動的に引き起こされるものではなく、半ば恒常的かつ漠然と抱かれるような、外的対象に対する不安と恐怖心を兼ね備えたそれとして捉えられるのである。よって本来であれば、こうした微細なニュアンスを伝えることが可能な別の表現を充てるべきであろうが、もう一方の「愛情」という情動との対称性を強調するという論理的な便宜を優先するために、本稿では「敵意」という表現を統一して使用することとしたい。
- 8) Freud にとって精神分析療法の課題は、個人の防衛機制を解除することで無意識の記憶内容を露わにし、それを意識的=理性的処理の可能な形へ導くことにあった。だが周知のようにそうした方法論は、「欲動仮説」に代表される彼の生物学主義とも相まって、「一者の心理学」と一般に揶揄されるような極めて孤立した人間観につながる。本論での母子相互行為場面を引き合いに出すならば、母親は「無意識的=非理性的敵意にまみれた病理的な存在」として当該場面から切り離されて扱われ、その上で敵意の表出根拠が彼女自身の欲

動の処遇との関連から分析される、という方向へ向かうのである。

- 9) 例えば「猫はマットの上にいる」というメッセージが発せられた場合、猫の居場所をただ単純に相手に教えるだけでなく(指示的水準)、「あなたに猫の居場所を教えてあげたのは友好の気持ちからだ」とか「これは単なる遊びだ」など、相手との「関係」それ自体の性質を規定し伝えるという狙いも不可避に含まれる(メタ・コミュニケーション的水準)。Batesonのコミュニケーション研究に関するより詳細な議論については、P. Watzlawick et al. (1967: 51-4) や長谷 (1989: 311-2) を参照せよ。
- 10) Batesonらが、「母親が子どもに対してなぜそのような感情 [= 敵意のこと] を抱くかについては、我々は具体的な関心を向けることはない」(TTS 213) と明確に述べている点に、この立場は端的に反映されているといえよう。
- 11) なお上記引用文の周辺箇所では、この(信念の)「妥当性」という部分に、繰り返し 'validity' という語が充てられている(Bateson & Ruesch 1951: 212, 217-8, 220-2 etc.)。本稿のキータームである「確証 (validating)」との接点がここで明らかとなる。また、ある何らかの不幸な信念に基づいて、それに妥当するような外的世界を選択していくというこの「自己-確証」という思考は、広い意味で「嗜癖」や「依存」といったテーマとも通じるものがある。
- 12) より厳密に言うと、受動的に被らざるを得なかった外的攻撃が始まりだったにもかかわらず、その攻撃を受け続けていた本人が一転してさも自らが招いた現象かのように解釈し、さらには能動的に引き寄せようとすら考えるに至るといって一連の逆説的思考を意味する。
- 13) 周知のように「演繹 (deduction)」とは、一般に享受されている既存の哲学的ないし論理的命題を起点にその応用可能性や限界を指摘する中で、日常生活の一部を占める対人関係や個人々の認知的・心理的経験のパターンを導き出す推論の一方方法である。本理論の場合、A. N. Whitehead & B. Russell (1910) によって提唱された「論理階梯 (Logical Types)」と、そこから派生した「論理的

パラドックス」が、既存の形式論理学の命題として参照されている。

本文で述べたように、Batesonらは本理論が主として演繹的に導かれた推論の産物である旨を示唆していた。しかし残念ながら、その中では上記の論理的命題に関する説明に終始する傾向があったためか、読者においては「推論」という部分が否定的に印象付けられてしまったように思われる。経験科学の立場と本来的に対峙するものとされる論理学ならびにその命題に依拠する演繹法といえども、本理論が実際の家族関係を観察しそこから自己-確証という重要な内的経験に直面したように、日常の生活世界から一切切り離された上で生活世界の一部を思い描くといったような「身勝手な推論」を意味するわけでは決してないのだ。端的に言うなら、本理論をめぐっては、もはや一般的に認められるような「経験科学/論理学」といった対比はそもそもそぐわないと筆者は考える。ましてや、この対比に沿った上で前者の科学的優位性を強調し、後者を非科学的であると断罪するような社会科学的ドクマティズムからは、本格的に袂を分かつべきであろう。本理論が真に問題とするところの心的外傷の体験過程を解明するにあたって、Batesonら自身が本来果たすべきであったと思われるこうした学問上の対立軸の解消もまた、重要な論点であると思われる。

- 14) 例えば S. Arieti (1974) のように、本理論を後期児童期という発達段階のみに適用可能なものと考え、外傷理論としての妥当性を見出そうとする論者もいる。

文献

- Abeles, G., 1976, "Researching the Unresearchable: Experimentation on the Double Bind," Sluzki, C. E. & Ransom, D. C. (eds.), *Double Bind: the Foundation of the Communicational Approach to the Family*, New York: Grune & Stratton, 113-49.
- Arieti, S., 1974, *Interpretation of Schizophrenia (second edition)*, New York: Basic Books.
- Bateson, G., 1955, "A Theory of Play and Fantasy," Reprinted in: Bateson, G., 1972, *Steps to an Ecology of Mind*, New York: Ballantine Book,

- 177-93.
- , 1956, "The Message "This is Play"," Schaffner, B. (ed.), *Group Processes: Transactions of the Second Conference*, New York: Josiah Macy, 145-242.
- , 1966, "Slippery Theories," *International Journal of Psychiatry*, 2: 415-7.
- , 1969, "Double Bind, 1969," Reprinted in: *Steps to an Ecology of Mind*, 271-8.
- , 1970, "A Systems Approach," *International Journal of Psychiatry*, 9: 242-4.
- , 1971, "Introduction: The Science of Mind and Order," *Steps to an Ecology of Mind*, xxiii-xxxii.
- , 1972, "Style, Grace, and Information in Primitive Art," *Steps to an Ecology Mind*, 128-52.
- , 1976, "Forward: A Formal Approach to Explicit, Implicit, and Embodied Ideas and to Their Forms of Interaction," *Double Bind: the Foundation of the Communicational Approach to the Family*, xi-xvi.
- Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J. & Weakland, J., 1956, "Toward a Theory of Schizophrenia," Reprinted in: *Steps to an Ecology of Mind*, 201-27.
- , 1962, "A Note on the Double Bind (1962)," *Family Process*, 2(1): 154-61.
- Bateson, G. & Ruesch, J., 1951, *Communication: The Social Matrix of Psychiatry*, New York: W. W. Norton & Co.
- Cullin, J., 2006, "Double Bind: Much More Than Just a Step 'Toward a Theory of Schizophrenia'," *Australian & New Zealand Journal of Family Therapy*, 27(3): 135-42.
- 藤田博康, 2002, 「文脈療法による非行理解と援助」, 『家族心理学研究』, 16 (1) : 13-27.
- Haley, J., 1976, "Development of a Theory: A History of a Research Project," *Double Bind: the Foundation of the Communicational Approach to the Family*, 59-104.
- 長谷正人, 1989, 「ダブル・バインドへのシステム論的アプローチ」, 『社会学評論』, 40 (3) : 310-24.
- , 1991, 『悪循環の現象学——「行為の意図せざる結果」をめぐって』, ハーベスト社.
- 蓮尾英明・水野泰行・阿部哲也・福永幹彦・中井吉英, 2008, 「治療への能動性を引き出すことが転機となった慢性膀胱炎の1症例」, 『消化器心身医学』, 15 (1) : 62-8.
- 功刀浩, 2010, 「近年注目されている統合失調症の仮説について」, 『こころのりんしょう à la carte』, 29 (2) : 215-20.
- 岡野憲一郎, 2007, 「わが国における解離性同一性障害——その成因についての一考察」, 『トラウマティック・ストレス』, 5 (1) : 33-42.
- Seligman, M. E. P., 1975, *Helplessness: On Depression, Development, and Death*, San Francisco: W. H. Freeman & Co.
- Sluzki, C. E. & Ransom, D. C., 1976a, "Comment on Part One," *Double Bind: the Foundation of the Communicational Approach to the Family*, 43-55.
- , 1976b, "Comment on Gina Abeles' Review," *Double Bind: the Foundation of the Communicational Approach to the Family*, 151-63.
- 渡辺和子・神内拓行・鈴木淳・竹内佳美・石田暉・渡辺俊之, 1991, 「理学療法における患者—治療者関係についての一考察」, 『理学療法学』, 18 (1) : 55-9.
- Watzlawick, P., Bavelas, J. B. & Jackson, D. D., 1967, *Pragmatics of Human Communication: a Study of Interactional Patterns*, New York: Norton.
- Whitehead, A. N. & Russell, B., 1910, *Principia Mathematica*, Cambridge: Cambridge University Press.

Reconstituting “Double Bind” as a Psychic Trauma Theory

FUJIMOTO Yoshitakaⁱ

Abstract : The ‘Double Bind Theory’ was proposed by G. Bateson, who is one of the important intellectuals of the 20th century, et al. The applicability of this theory has been proven in many academic fields, for instance in macro sociological analysis. But on the other hand, the very first purpose of this theory is hardly looked back on positively today. That purpose was to theorize that some peculiar kind of ‘psychic trauma’ experiences occurred in intimate and asymmetric personal interactions, fundamentally in some ‘mother-child relationships’. In this article, the author firstly researches the main factor, that this important purpose and its contents are hardly looked back on today, and points out that this factor has resulted in misreading of the whole aspect of psychic traumatic experiences clarified in this theory. Many previous researches grasped some ‘double bind situations’ quite definitely and quantitatively, in other words, as temporally-spatially divided. The author considers these epistemological tendencies are just the main factor. Then to elucidate the whole aspect of psychic traumatic experiences clarified in this theory, the author secondly identifies the following two key terms, ‘self-validating’ and ‘abstractness’, which have been hardly taken up until now. The former means a process in which a child who fell into the double bind ‘actively’ interprets its situation ‘punitively’ and constructs his external world selectively, and the latter means the temporal-spatial painful sequences such a self-validating process is forming.

Keywords : Double Bind, Mother-Child Relationship, Psychic Trauma, Self-Validating, Abstractness

i Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University